

既刊号目次

■筑波大学平家部会論集 第一集

(平成元年3月)

「平治保元平家之物語」——『普通唱導集』所載一句の吟味——

犬井 善壽

平家歌人と万葉歌・万葉語

千草 聡

俊成卿女家集論——巻頭第一首の詞書を考える——

永田 初枝

『通盛』論——その変容に関する一試論——

徐 楨完

世阿弥自筆本「江口」本文考——料紙の継ぎ目と改行をめぐって——

飯塚恵理人

■筑波大学平家部会論集 第二集

(平成二年8月)

仁和寺と平氏——平家歌壇形成の一面——

千草 聡

『平家物語』と『保元物語』『平治物語』との関連

亀井 依子

——共通記事についての素材の検討——

俊成卿女家集論

永田 初枝

『求塚』試解——その変遷過程の一端をめぐって——

徐 楨完

状と冊——世阿弥自筆能本の体裁について——

飯塚恵理人

平経正和歌歌番号対照表

犬井 善壽

■筑波大学平家部会論集 第三集

(平成四年3月)

「ナサケハ人ノタメナラズ」考

犬井 善壽

『平家物語』の女人「出家」について

李 鮮瑛

——横笛説話の「愛」をめぐって——

『朗詠集』に見えない朗詠集——『朗詠譜本』の十曲——

青柳 隆志

守覚法親王略年譜——和歌活動の面を中心に——

千草 聡

俊成卿女家集論——『千五百番百首』の配列について——

永田 初枝

■筑波大学平家部会論集 第四集

(平成六年7月)

朗詠における禁忌——「雲」の朗詠をめぐって——

青柳 隆志

『平家物語』の女人造型と「恥」——祇王を中心に——

李 鮮瑛

『曾我物語』の一万箱王兄弟

小井土守敏

——幼年期の二人の描かれ方の諸本間の相違——

『宗祇終焉記』小考

崔 忠熙

『六花和歌集』所載西行和歌歌番号対照表

犬井 善壽

■筑波大学平家部会論集 第五集

(平成七年11月)

『北院御室御集』伝本考

千草 聡

——宮内庁書陵部蔵『守覚法親王集』を中心に——

犬井 善壽

『金槐和歌集』貞享本系統本文考——所載歌と歌順の吟味——

佐藤 智広

宗尊親王『文応三百首』伝本分類私考

大磯の虎をめぐる十郎祐成の描かれ方

——『曾我物語』諸本間に見られる相違——

『武道伝来記』の二重構造——「平家」素材の利用方法から——

小井土守敏

金 栄哲

■筑波大学平家部会論集 第六集

(平成九年6月)

曾我十郎五郎の分担——「さはがぬ男」と「たたらぬ男」——

小井土守敏

平貞文の文芸活動について——その歌の特質を中心に——

金沢 朱美

西行の水の表現

巖 慶娥

『金槐和歌集』定家本系統本文考

四系統分類と定家本系統の系列分類——

宗尊親王『文応三百首』の流伝について

犬井 善壽

——『井蛙抄』所載本文を手懸りとして——

佐藤 智広

『本朝二十不孝』考——創作意図の二元性を中心に——

鄭 澄

■筑波大学平家部会論集 第七集

(平成一一年3月)

『保元物語』本文形成考

——為朝と鬼の末裔との邂逅場面をめぐって——

『曾我物語』における梶原景季について

佐藤 智広

『北院御室御集』と『御室五十首』『正治初度百首』

各守覚歌との関連性をめぐって

千草 聡

『久安百首』部類本から『千載和歌集』へ

——編集方針の継承と展開——

技粹諸系統『金槐和歌集』歌番号対照表

山本 晶子

——柳宮重槐本系統賀茂真淵評語本との比較——

犬井 善壽

■筑波大学平家部会論集 第八集■

(平成二二年12月)

伊勢物語古注釈の方法―各小段の「女」の実名を中心に― 飯塚恵理人
 謡曲(忠度)論―「文武二道」の武人シテ忠度の造型― 岩城賢太郎

あとがき

何かと雑用にかまけ、『平家物語』の読書会を休み勝ちのこの平家部会のこのごろである。

ここ二三年の体調不調を理由にしたところではあるが、それよりも、一番の理由は、私の怠惰心である。部員諸君には、そして長く部会を継続して下さった卒業生部員には、お詫び申しあげる。

ただ、この「部会論集」は、部員諸君の研究に対する熱意で、こうやって継続できた。嬉しいことである。

卒業生部員の千草君の論は、今まであたたためていた先年の中世文学会での研究発表を、ここに練り上げての投稿である。韓国へ戻っている李さんの論は、筑波の他の研究会の論文集の続稿として、久し振りにこの「部会論集」で『平家物語』論を展開してくれたもの。小井土君は、短いもの乍ら、『曾我物語』の本文に関する大事な問題を提示してくれた。妻さんは、訪日してから始めた西行和歌の本文研究の一端を示してくれた。本文研究の手続きを身につけた今後、作品研究に戻り、本文研究を踏まえた西行歌の作品研究の成果を示してほしい。児島さんの論は、勤務先の激務の中で、教育研究科在学当時の私担当の演習の単位レポートを發展させて、纏めあげたもの。岩城君は、昨年度の中世文学会春季大会での研究発表を、会場での諸先生のご助言を活かして、ここに論文として形にし、寄稿してくれた。

このように、この部会の会員は、卒業生部員も在学部員も、読書会の方

馬場信憲著『曾我物語評判』の序文に関する覚え書き

小井土守敏

大分県立図書館蔵「碩田叢史」所収

『金槐和歌集佳調技』の本文について

犬井 善壽

は滞りがちであつても、各人各人、それぞれの研究を發展すべく、日夜努力を重ねている。この論集に載るそれぞれの論が、その結晶なのである。大向こうをうならせるまでの論には至っていないかもしれないが、それに新しい発見があり、論文のおもてには出ない執筆者の努力を知る私としては、嬉しいことである。怠惰心の私は部員諸君の努力を見習わねば、と思うことしきりである。

『平家物語』の読書会はお休み勝ちであるが、部会の忘年会・新年会・歓迎会・歓送会といった、親睦の会は、この論集と同じく、実に几帳面に継続している、ということを、申し添える。これはこれで、人を繋ぐ輪として大事なことである、と考えるからである。

年度も改まったこと、この部会本来の百二十句本『平家物語』の読書会を、始動させたい、と思うこのごろである。(犬井記)

筑波大学平家部会論集 第九集

平成十四年六月三十日 発行

発行者 筑波大学平家部会
 つくば市天王台一丁目一番地一

印刷者 筑波大学文芸・言語学系犬井研究室内
 株式会社 イセブ